

10周年を迎える、15日間の映像とアートの国際フェスティバル 第10回恵比寿映像祭の総合テーマは「インヴィジブル(見えないもの)」に決定！ 平成30(2018)年2月9日(金)～2月25日(日)開催

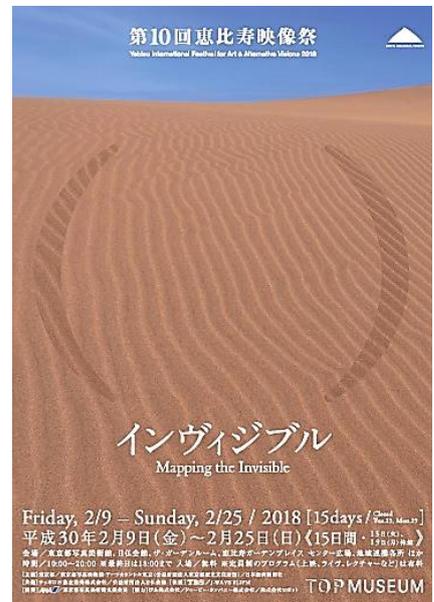
第10回恵比寿映像祭の総合テーマおよび開催概要、第1次参加アーティスト情報を発表します。
また会期に先がけ映像祭を読み解く「国際シンポジウム」を、東京都写真美術館の映像展と連動して開催。
会期中は展示や上映のほか恵比寿地域でのプログラムで映像体験のいまに出会えます。

総合テーマ

インヴィジブル Mapping the Invisible

「芸術とは見たものを表現するのではなく、見えないものを見えるようにすることである」。画家パウル・クレーの言葉を引用するまでもなく、芸術は、目に見えないものを見えるようにすることで、見る側を刺激し、新しい対話をうみだしてきました。一方、光学技術によって誕生した写真や映像は、見えないものを見えるようにするのみならず、実際には存在し得ない対象まで可視化してきました。映画創生期を代表する監督ジョルジュ・メリエスは、自らのマジックショーのなかで映画を上映し、その視覚効果的作品からSFXのバイオニアとも呼ばれています。映画は、現実世界をそのまま映し出すことが難しかった発明当時においては、魔術や幽霊のような存在としても受け止められました。しかし、映像が日常に浸透している21世紀の現在において、誰も映像を魔術や幽霊と考えることも、また現実と見間違えることもありません。むしろ、大量のイメージがあふれる現代だからこそ、何が現実をあらわしているかが、見えにくい時代にもなっています。映像は、光と影によってイメージを映し出すメディアであり、世界を光によって照らし出す一方で、同時に、可視化できない現実を浮かび上がらせる特性をもちます。第10回恵比寿映像祭では、映像が潜在的に表現してしまう、この不可視性＝「インヴィジブル(見えないもの)」を総合テーマにすることで、映像の見方の歴史を考察し、現代における「インヴィジブル」を読み解くことから、未来の可能性を探っていきます。

[恵比寿映像祭ディレクター 田坂博子]



開催概要

[名称] 第10回恵比寿映像祭「インヴィジブル」 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2018: Mapping the Invisible
 [会期] 平成30(2018)年2月9日(金)～2月25日(日) [15日間] (13日(火)、19日(月)休館)
 [時間] 10:00～20:00(最終日は18:00まで) [入場] 無料 ※定員制のプログラムは有料
 [会場] 東京都写真美術館
 日仏会館
 ザ・ガーデンルーム
 恵比寿ガーデンプレイス センター広場
 地域連携各所
 【展示】 【上映】 【シンポジウム】 【レクチャー】 【ラウンジトーク】
 【展示】 【シンポジウム】
 【ライブ・イベント】
 【オフサイト展示】
 【地域連携プログラム】 【地域発信プロジェクト】

[主催] 東京都／東京都写真美術館・アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)／日本経済新聞社

[共催] サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館 [後援] TBS／J-WAVE 81.3FM

[協賛] ANA／東京都写真美術館支援会員 [協力] ぴあ株式会社／ドゥービー・カンパニー株式会社／株式会社ロボット

[公式ホームページ] www.yebizo.com [Instagram] www.instagram.com/yebizo

トピックス

- 1 記念すべき第10回の総合テーマは「インヴィジブル Mapping the Invisible」に決定。
多彩な映像表現をアートの視点で見つめる国際フェスティバル「恵比寿映像祭」の第10回テーマは「インヴィジブル」。大量のイメージが日常に溢れ何が現実かが見えにくいいま、映像は世界を光で照らし出すと同時に、見えていない隠れた日常をも浮かび上がらせます。映像があらわす、この見えないもの＝「インヴィジブル」をテーマに、展示や上映イベントなどを複合的にお届けします！
- 2 第1次参加アーティスト、12組を発表！ [今後更新予定] **p.4-6**
国際的に活躍する現代美術家ラファエル・ローゼンダール(オランダ)やジェームス・リチャーズ(イギリス/ドイツ)のほか、新進気鋭作家のジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ(アメリカ/ドイツ、日本/ドイツ)や青柳菜摘(日本)など、多数のアーティストが参加。多彩な作品が一堂に会します。
出品予定アーティスト: 青柳菜摘(日本) / ジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ(アメリカ/ドイツ、日本/ドイツ) / ガブリエル・エレラ・トレス(メキシコ/ポーランド) / トゥーパインゾーオー(ミャンマー) / 出光真子(日本) / 永田康祐(日本) / 岡部道男(日本) / ジェームス・リチャーズ(イギリス/ドイツ) / ラファエル・ローゼンダール(オランダ) / スティーヴ・サンゲドルチェ(カナダ) / 横溝静(日本/イギリス) / コティングリー妖精写真および資料展示(イギリス) ほか
- 3 1960年代エクспанデッド・シネマ(拡張映画)から最新作まで多様な映像表現が登場！
マルチプロジェクションやループ上映、ライブ・パフォーマンスなど先駆的実験が行われた1960年代のエクспанデッド・シネマ(拡張映画)から、新進気鋭作家による最新作まで、多様な上映形式の映像表現が登場！ さまざまな映像のあり方を紹介し、写真・映像専門の美術館ならではの映像体験が実現します。
- 4 地域と世界を双方向につなぎ、東京都・恵比寿から映像文化を発信します！ **p.7**
恵比寿地域の文化施設・ギャラリーでの連携企画のほか海外フェスティバルともリンクし、恵比寿の街から映像文化を発信！ 「地域連携プログラム」には、新たにCAGE GALLERY、LOKO GALLERY、イスラエル大使館が加わります。
- 5 会期に先がけ映像祭を読み解く「国際シンポジウム」を開催！ [平成29(2017)年10月9日(月・祝)] **p.3**
美術・映像研究者が登壇し、ジャンルを越えて映像表現の可能性を探求してきた映像祭が、その歴史を紐解きます。シンポジウムは、映像メディアの歴史を振り返る、東京都写真美術館の映像展「エクспанデッド・シネマ再考」展[平成29年8月～10月]と連動して展覧会期中に行われます。

エクспанデッド・シネマ(拡張映画)……従来の映画館などでのスクリーンに投影される上映形式の制約を越えて、多様な方法で上映される映画。1960年代半ば頃から欧米を中心に、美術家や実験映像作家によって展開されました。



左:「エクспанデッド・シネマ再考」展より 撮影:大島健一郎 || 上段左から:「第9回恵比寿映像祭」より オフサイト展示/シンポジウム |

下段左から:「第9回恵比寿映像祭」より ライブ・イベント/ラウンジトーク 撮影:新井孝明 || 写真提供:東京都写真美術館

第10回恵比寿映像祭プレ・イベント 国際シンポジウム

会期に先がけ恵比寿映像祭を読み解く「国際シンポジウム」を開催いたします。

美術・映画研究の豪華パネリスト陣が映像祭を映像史から読み解きます。
映像メディアの歴史を振り返る当館の映像展「エクспанデッド・シネマ再考」と連動して開催。
ジャンルを横断して映像表現の可能性を探求してきた恵比寿映像祭の原点が紐解かれます。

インヴィジブル、インターメディア、エクспанデッド—映像の可能性

第10回恵比寿映像祭のプレ・イベントとして、恵比寿映像祭を読み解くための国際シンポジウムを開催します。今回の総合テーマは「インヴィジブル」。映像の潜在的特性であると同時に、現代を考えるためのキーワードにもなっています。本シンポジウムは、東京都写真美術館の「エクспанデッド・シネマ再考」展[平成29(2017)年8月15日(火)～10月15日(日)]と連動して、美術、映像の研究者を招き、映像の歴史を考察することで、未来の可能性を探る試みです。

[日時]平成29(2017)年10月9日(月・祝)14:00～17:00(開場13:45) ※日英同時通訳付 [会場]東京都写真美術館 1Fホール

[定員]190名(整理番号順入場/自由席) [入場]無料/要入場整理券 ※当日10:00より1Fホール受付で入場整理券を配布します。

[出演]ブランデン・W・ジョセフ(コロンビア大学教授、美術研究者)

平沢剛(明治学院大学研究員、映画研究者)

ジュリアン・ロス(ロッテルダム国際映画祭プログラマー、映画研究者)

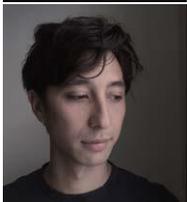
[協力]明治学院大学言語文化研究所



ブランデン・W・ジョセフ | Branden W. JOSEPH | コロンビア大学フランク・ガリボリ近現代美術教授。代表的な著書に、*Beyond the Dream Syndicate: Tony Conrad and the Arts after Cage*, Zone Books, 2008、*Anthony McCall: The Solid Light Films and Related Works*, Northwestern University Press, 2005。また、アンディ・ウォーホル、ポール・シャリッツ、キャロリー・シュニーマンについてのエッセイを多数執筆。



平沢剛 | HIRASAWA Go | 映画研究者。明治学院大学言語文化研究所研究員。編著に『アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス』、聞き手に葛井欣士郎『遺言』(以上、河出書房新社、2001、2008)、特集企画に“Art Theater Guild and Japanese Underground Cinema, 1960-1986”(ニューヨーク近代美術館、2012-13)、“Throwing Shadows: Japanese Expanded Cinema in the Time of Pop”(ジュリアン・ロスとの共同企画、テート・モダン、2016)など。



ジュリアン・ロス | Julian ROSS | 映像研究者、映像キュレーター。ロッテルダム国際映画祭プログラマー。英国ウェストミンスター大学博士研究員。Tate Modern、BOZAR、Centre for Fine Arts、Art Institute of Chicago、EYE Film Institute などで日本の実験映画を中心に映画・パフォーマンスを紹介。論文に“Curating Problems for Expanded Cinema,” *Preservation, Radicalism and the Avant-Garde Canon*, Palgrave MacMillan, 2016(共著)、「パフォーマンスとしてのエクспанデッド・シネマ」『アメリカン・アヴァンガルド・ムーヴィ』(共著、森話社、2016)など。

2018年、恵比寿映像祭は第10回を迎えます。

恵比寿映像祭は、平成21(2009)年の第1回以来、年に一度開催してきた映像とアートの国際フェスティバルです。展示、上映、ライブ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的にを行い、今回で10周年を迎えます。ロゴのオープンなフレームとしてのカッコが象徴するように、映像をめぐるひとつではない答えを探りながら、映像分野の活性化を領域横断的にめざしてきました。これまでに参加した作家・ゲストは総勢840名以上におよびます。多くの作り手と受け手がフェスティバルに集うことで、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について、広く共有するプラットフォームへと成長してきました。



恵比寿映像祭
Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions

参加アーティスト情報

参加アーティストのうち12組を発表いたします。

※本リリース時点での出品予定アーティストです。

[掲載はアルファベット順]

国際的に活躍する現代美術家ラファエル・ローゼンダール(オランダ)やジェームス・リチャーズ(イギリス/ドイツ)のほかに、新進気鋭作家のジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ(アメリカ/ドイツ、日本/ドイツ)や青柳菜摘(日本)など、多数のアーティストが参加。「コテイングリー妖精写真および関連資料」(イギリス)や、当館所蔵作品など多彩な作品が一堂に会します。

青柳菜摘 | AOYAGI Natsumi 展示



1990年東京都生まれ。ある虫や、身近な人、植物、景観にいたるまであらゆるものの成長の過程を観察する上で、いかに記録メディアや固有の媒体に捉われずに表現することができるか思考している。作者である自身が見ているものがそのまま表われているように錯覚させる表現と、観客がその錯覚に気づく手段を作品に取り入れようとしている。近年の個展に「富士日記」(NADiff Gallery)、「孵化日記 2011, 2014-2016」(NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、以上、2016)など。

青柳菜摘《孵化日記 タイワン》2016年[参考図版]

AOYAGI Natsumi, *Incubation Diary TAIWAN*, 2016 [related image] Photo: WADA Shintaro

ジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ | Jay CHUNG & Q Takeki MAEDA 展示



ジェイ・チュン:1976年ウィスコンシン州(アメリカ)生まれ、キュウ・タケキ・マエダ:1977年愛知県生まれ。2002年からコラボレーションを開始、ベルリンを拠点に10年以上活動を続けている。彼らの作品は、アートのシステムや、そこに关わる人々を批評的且つ自己反照的に探求しながら、アートの生産と普及を取りまく末梢の物語を皮肉とユーモアをもって表明する。

ジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ《Untitled》2015年

Jay CHUNG & Q Takeki MAEDA, *Untitled*, 2015 / Courtesy of Isabella Bortolozzi Galerie

ガブリエル・エレラ・トレス | Gabriel HERRERA TORRES 展示



エレラは、メキシコ出身の映画監督、ビデオ・アーティスト。現在はメキシコとポーランドを行き来しながら活動している。映画研究センター大学(メキシコシティ)およびウッチ映画大学(ポーランド)で映画制作を学ぶ。短編映画やインスタレーション、アニメーションを複数制作している他、社会や環境を主題とした記録映画の制作にも携わっている。自主制作会社ブラック・マリア(メキシコ)のメンバー。

ガブリエル・エレラ・トレス《適切な運動による神への近寄り方》2016年

Gabriel HERRERA TORRES, *How to Reach God Through Proper Exercising*, 2016

トゥーパインゾーオー | Htoo Paing Zaw Oo 上映



1987年ヤンゴン(ミャンマー)生まれ、在住。医学部卒業後に映画制作の道を志す。2011年以降40本のミュージックビデオを作成し、2016年には最優秀ミュージックビデオ監督賞を受賞した。2012年に短編を撮り始め第2回ワットン映画祭で最優秀短編賞を受賞。2017年には初の長編映画《ナイト》公開を迎えた。

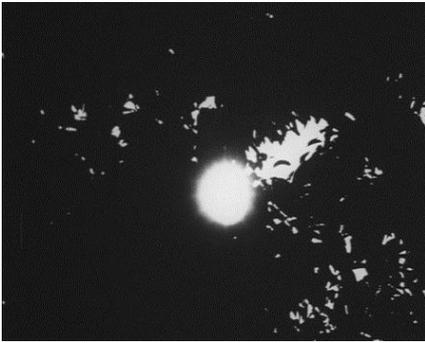
トゥーパインゾーオー《ロング・タイム・ノー・シー》2012年

Htoo Paing Zaw Oo, *Long Time No See*, 2012

参加アーティスト情報

出光真子 | IDEMITSU Mako

上映



1940年、出光興産創業者・出光佐三の四女に生まれる。お茶の水女子大学附属小・中・高から早稲田大学第一文学部に進む。卒業後ニューヨークへ留学。抽象画家サム・フランシスと結婚。二児の母。妻であり母であることを超える創造表現への思いやみがたく、映像作家の道を歩む。自身の経験からフェミニズムをベースに、家庭における親と子、表現者として女性が生きる際の社会的摩擦などを問いつづける。著書に『ホワット・ア・うーまんめいど——ある映像作家の自伝』（岩波書店、2003）。

出光真子《At Yukigaya 2》1974年

IDEMITSU Mako, *At Yukigaya 2*, 1974

Collection of Tokyo Photographic Art Museum

永田康祐 | NAGATA Kosuke

展示



1990年愛知県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了。主な展示に、「Malformed Objects——無数の異なる身体のためのブリコラージュ」(山本現代、2017)、個展「Therapist」(トーキョーワンダーサイト本郷、2016)、「マテリアライジング展 III——情報と物質とそのあいだ」(@KCUA、2016)などがある。

永田康祐《Sierra》2017年

NAGATA Kosuke, *Sierra*, 2017

岡部道男 | OKABE Michio

上映



1937年東京生まれ。慶應義塾大学卒業。1964年「アンデパンダン 64」展、65年内科画廊個展など多くの現代美術作品を発表する。その後、映画制作に携わり、処女作《天地創造説》(1967)で草月実験映画祭奨励賞、《少年嗜好》(1973)でベルギーのクノック・ル・ザウテ国際実験映画祭グランプリをそれぞれ受賞。日本の前衛映画界の草分けとなる。また、映画制作のかたわら、ラジオ番組の短編小説を多数執筆。同時に雑誌に幻想小説を発表。

岡部道男《クレイジー・ラブ》1968年

OKABE Michio, *Crazy Love*, 1968

ジェームス・リチャーズ | James RICHARDS

展示



1983年、カーディフ(イギリス)生まれ。近年の個展に第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ、ウェールズ・イン・ヴェニスでの「Music for the Gift」(2017)、ICA (ロンドン)での「Requests and Antisongs」(2016)がある。2014年に Ars Viva Prize を、2012年にジャーマン・アワードを受賞。2014年ターナー賞候補の一人。

ジェームス・リチャーズ《夜のラジオ》2015年

James RICHARDS, *Radio at Night*, 2015

Courtesy of the Artist and LUX, London; Cabinet, London; Isabella Bortolozzi, Berlin; and Rodeo, London

参加アーティスト情報

ラファエル・ローゼンダール | Rafaël ROZENDAAL 展示



1980年オランダ生まれ、ニューヨーク(アメリカ)在住。インターネットを拠点に、ドメイン名も含めたウェブサイト全体を一つの作品として制作し続け、現在は、「レンチキュラーペインティング」シリーズを発表し絵画作品で開いた新たな境地が高い評価を得ている。近年の主な展覧会として、「New Gameplay」(ナム・ジュン・パイク・アートセンター、ソウル、2016-2017)、茨城県北芸術祭(茨城県、2016)など。

ラファエル・ローゼンダール《Into Time 15 05 02》2015年

Rafaël ROZENDAAL, *Into Time 15 05 02*, 2015

© Rafaël Rozendaal Courtesy of Takuro Someya Contemporary Art Photo: Ken Kato

スティーヴ・サンゲドルチェ | Steve SANGUEDOLCE 上映



1959年トロント(カナダ)生まれ、在住。ホームムーヴィーへの執着から「家族」に永続的な関心を抱いたサンゲドルチェは、シェリダン・カレッジ在学時(1978-1981)に、そうした興味を表明する機材を手にする。個人的ドキュメンタリーの気風に学び、個の奥深く極私的な瞬間に執拗に耳を傾ける仕事を始める。大学卒業後、暗く詩的なドキュメンタリー《満月の暗闇》(1983)を共同監督。続けて手掛けた《アウエイ》(1996)、《スマック》(2000)、《デッド・タイム》(2005)などにより、北米初の日記映画作家の一人としての地位を確立する。

スティーヴ・サンゲドルチェ《Land of Not Knowing》2016年

Steve SANGUEDOLCE, *Land of Not Knowing*, 2016

横溝静 | YOKOMIZO Shizuka 展示



東京都生まれ、ロンドン(イギリス)在住。1989年渡英、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジにてファイン・アート修士号取得後、写真や映像を中心に制作を続けている。「見る」という行為を作品の構造に取り入れた写真作品や、時間と身体についての映像作品等を発表。近年は、イメージと人間との関係について考察している。

横溝静《PRAYER》2007年

YOKOMIZO Shizuka, *PRAYER*, 2007

Courtesy of Wako Works of Art

コティングリー妖精写真および関連資料 |

The Cottingley Fairy Photographs and Related Materials 展示



1917~1920年に英国コティングリー村の二人の少女たちによって撮影された「妖精写真」およびその関連資料。関連資料として、妖精写真の調査を行った神智学者エドワード・L・ガードナーの遺品(井村君江所有)から、コティングリー以降の妖精写真、同時代の心霊写真、関係者のスナップ写真、調査メモなどを展示。

撮影者不詳《赤ちゃんの上を飛ぶ妖精たち》撮影年不詳、神智学者エドワード・L・ガードナーの遺品より[参考図版]

Photographer Unknown, *Fairies on a Baby*, Year Unknown,

From the Estate of Theosophist Edward L. GARDNER [related image]

地域連携プログラム | 地域発信プロジェクト

地域と世界を双方向につなぎ、東京都・恵比寿から映像文化を発信します。

会期中、恵比寿地域の文化施設やギャラリーで多数の連携企画を開催。

地域とのつながりをさらに深めながら、国際連携も行うことで、東京都・恵比寿から映像文化を発信します。

「地域連携プログラム」は、第3回恵比寿映像祭より実施しています。第10回恵比寿映像祭の総合テーマ「インヴィジブル」に合わせた、施設それぞれ独自の視点による展示やイベントなどが展開されます。今回は、CAGE GALLERY、LOKO GALLERY、イスラエル大使館が新たに加わります。これまで培った地域ネットワークの発信力をさらに高めて開催します。

※そのほか、映像分野の創造活動の活性化をめざして、恵比寿地域で「地域発信プロジェクト」を開催予定です(詳細は決定次第、発表します)。



地域連携プログラム参加施設・団体:

公益財団法人日仏会館 |

TMF 日仏メディア交流協会 /

YEBISU GARDEN CINEMA /

伊東建築塾 / MA2 Gallery /

Gallery 工房 親 / MuCuL /

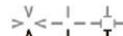
CAGE GALLERY / NADiff a/p/a/r/t /

G/P gallery / MEM / LIBRAIRIE 6 /

AL | 企画: TRAUMARIS / NPO 法人アーツ

イニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] /

LOKO GALLERY | 企画: イスラエル大使館



左:「第9回恵比寿映像祭」より 地域発信プロジェクト | 中2点:スタンプラリー | 右:ガイドツアー | 提供:東京都写真美術館 撮影:新井孝明

お問い合わせ

- 本リリースで使用している写真を広報用画像としてご用意しております。ご希望のプレスの方は、
(1) ご希望画像の作品名 (2) 貴媒体名 (3) 掲載予定時期
を表記のうえ、下記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。
- さらに詳細な参加アーティストおよびプログラムなどの内容は、12月頃発表予定です。

プレスリリース・広報用画像・ご取材に関するお問い合わせ | 恵比寿映像祭プレス担当: 平(たいら)、大西(おおにし)

電話: 090-1149-1111 (平) 090-9621-5235 (大西) / ファクス: 03-3468-8367 / E-mail: info@tmpress.jp

恵比寿映像祭に関するお問い合わせ | 恵比寿映像祭担当(東京都写真美術館): 柳生(やぎゅう)、印牧(いんまき)、堀江(ほりえ)

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話: 03-3280-0076 / ファクス: 03-3280-0033 / E-mail: yebizo_press@topmuseum.jp ※報道・媒体関係者様に限らせていただきます。

※出品作品および出品アーティストなど内容については変更する場合があります。予めご了承ください。